

隆起再現断層の評価に係る考え方の整理

	審査会合でのコメント	JP検討シナリオ	JPの考え方
現象	大間崎背斜は活褶曲 敷地の近くにローカルな隆起 大間～佐井の傾動	大間崎背斜の活動性はない 隆起が速い領域 大間～佐井の傾動	背斜を挟む上載地層法で活動性を否定 詳細な調査結果から、ローカルな隆起は認められない 震源断層は認められないため、累積的な変位の要因を検討
要因	震源断層想定が一つの考え方	非弾性変形	ガイドの記載を満足した、累積的変位のメカニズム検討
解決策の考え方	古い地質構造の再活動	地形発達過程を考慮した仮想的な活断層の想定	耐震設計上の保守性の観点から、地形を説明できる仮想的な活断層を想定して検討 通常の活断層評価ではリニアメントを説明できる震源断層を検討するのと同様に、ガイドに従い本件でも隆起を説明できる震源断層の検討は必要(地形発達過程を検討しないと、隆起を考慮したことにならない)
解決方法	F-14断層起点の扇形の領域	F-14断層起点の扇形の領域(隆起再現断層の想定領域)	地表に痕跡がないため隆起が速い領域中のF-14断層を起点とし、古い地質構造に基づいて設定
		+地形発達過程	地質調査データから震源断層を想定できないため、隆起再現断層の想定領域を参照しつつ、震源断層モデルを想定した隆起シミュレーション実施
		震源断層モデルの暫定設定	地震動評価の前段階で、地形の検討が必要。28ケースを暫定設定・検討
		地形発達過程検討	地形の説明性がないものを除外し、そこそこ合えば良い 全て断層運動と考えることで、他の要因による地震動への影響を排除する意味で保守的
		領域再設定 (震源モデルの設定範囲)	ガイドの記載を満足した領域(地形を考慮した結果、領域が狭まる) 震源断層モデルは、28ケース ⇒5ケースに絞り込み
地震動評価		震源断層モデル設定	地質構造&地形発達過程の、ガイドの記載を満足した震源モデルにより、絞り込まれた5ケースを基にスクリーニングし、基本ケースを設定したうえで地震動評価を実施
		敷地への影響検討	Noda et al.(2002)の方法により、代表ケース選定のスクリーニング
		基本ケース&不確かさ検討	代表1ケースを基本ケースに、更に不確かさを適切に考慮
		地震動評価	応答スペクトルに基づく手法及び断層モデルを用いた手法により評価 ⇒地形説明性のある震源モデルと、敷地への影響大の震源モデルの位置・パラメータとは、ほぼ一致
(参考)	傾向分析	地震動レベルの傾向	28ケースについて傾向を分析 ⇒地形説明性の有無に係わらず抽出した敷地への影響大の震源モデルと、上記5ケースとはおおむね一致し、基本ケースはこれに含まれる

凡例)



隆起シミュレーションによる地形発達過程の検討